

## 上條 勇教授のご退職にあたって

金沢大学経済学経営学系長 野村 真理

上條先生は、第1次ベビーブーム時代の最終年にあたる1949年に北海道で生まれ育てられた道産子である。大学も、学部、大学院時代を通じて北海道大学で学ばれた。

いわゆる団塊世代の上條先生が大学に入学されたころ、日本経済は高度成長から低成長時代への転換期をむかえていた。高度成長がもたらした公害問題が深刻化するなか、人間生活の真の豊かさとは何かが問われ始めていた。大学でも、学生たちが灰色に灰色を塗り込める現状追認の学問を拒否して講義棟を封鎖し、理性的ならざる現状の変革を唱えて、盛んにアジ演説をぶっていた。北海道大学の文類に入学された上條先生は、教養部在籍の2年目に大学封鎖で1年間講義が行われず、その「余暇」を利用してマルクスの「資本論」全巻を読破されたというからすごい。入学時は経済学部を志望されたわけではなかったが、この読書が切っ掛けで経済学に関心をもち、経済学部に進むことを決められたとのことである。いまのおとなしい学生には、大学封鎖やヘルメット、ゲバ棒など、想像すらできないだろうが、経済学経営学系のスタッフでも、実際に学生運動を体験されたのは、上條先生あたりがそろそろ最後のお一人に近いのではないかと思う。さらに経済学の研究者でも、「資本論」など一字も読んだことがない人の方がもはや多数派だろう。

北海道大学で大学院博士課程を修了された後、上條先生は、北海道大学経済学部助手を経て、1981年に教養部の経済学担当教員として、当時は旧金沢城址にあった金沢大学に着任された。金沢大学では、前年の1980年の4月に、法文学部経済学科から経済学部が分離独立している。教養部と学部は部局として互いに独立しており、教養部所属の教員と学部所属の教員のあいだにはあまり交流がなかったのではないだろうか。上條先生が、経済学部(現在は経済学経営学系・経済学類)のスタッフになられたのは、1996年の教養部廃

止後である。経済学部(経済学類)ではヨーロッパ経済統合論を担当された。担当科目は、ご自身のご希望であったとお聞きしている。

上條先生は、すでに学部の卒業研究でヒルファディングの金融資本論研究に着手され、大学院修士課程、博士課程で研究を深められた後、1987年に「ヒルファディングと現代資本主義」(梓出版社)を上梓された。同書で経済学博士号を取得されている。ヒルファディング研究の専門家がなぜヨーロッパ統合論なのか。上條先生は、選暦記念に「経済学と私——激動の歴史とともに歩んで」というタイトルのエッセイを「金沢大学経済論集」(第30巻、第2号)に寄稿され、そこでご自身の研究史を振り返られている。したがって、私がここで下手な文章で紹介するより、ぜひとも先生ご自身のエッセイを読んでいただきたいのだが、ヒルファディングは、ヴァイマル共和国で2度、大蔵大臣を務めた。そのとき彼が試みたのが、資本主義の構造改革による福祉国家の実現であった。これは、EU(ヨーロッパ共同体)の「社会的ヨーロッパ」(福祉国家のヨーロッパ)の理念を先取りするものであり、ヴァイマル期のヒルファディングの再評価がEU研究につながったとのことである。しかし、1952年のECSC(ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体)を出発点とするヨーロッパの経済統合は、上條先生が講義を始められてからも、制度的深化と地域的拡大を継続し、他方では、それらに対する人々の反発やEU離脱の主張、またギリシア危機等も発生した。こうした動きを刻々とフォローしなければならない講義は、実にたいへんである。講義のスタイルによって違うかもしれないが、15回分の講義ノートの完成には、時として論文数本分に匹敵する労力を要し、一度ノートを作ったら、2～3年使い回さないと引き合わないような気がする。以前、先生から、講義ノートは毎年書き換えるとお聞きしたことがあり、本当に頭が下がる思いである。

経済学研究とならび、上條先生のもう一つのご専門は、オーストロ・マルクス主義の民族問題の専門家で知られるオットー・パウアーの思想史研究であり、1994年に「民族と民族問題の社会思想史——オットー・パウアーの民族理論の再評価」(梓出版社)を上梓されている。上條先生が経済学部にくられるまで、私は先生とは面識がなく、私と先生の出会いは、この本が最初である。オーストリアの民族問題は私の専門にも関係し、上條先生の御著書か

ら多くを学ばせていただいた。

上述したように、上條先生は還暦記念に「金沢大学経済論集」にご自身の研究史と研究業績リストを公開されたが、少し早すぎたような気がする。というのも、その後2011年に、ヒルファディングの『金融資本論』出版100周年記念として400ページを超える大著「ルドルフ・ヒルファディング——帝国主義論から現代資本主義論へ」(御茶の水書房)を上梓され、目下、オットー・パウアーの民族理論に関して2冊目の御著書を準備中だからである。先生の衰えを見せぬ研究意欲を見習いつつ、御退職後の御健康と御研究のますますの発展を祈念したい。

末尾ながら、経済学経営学系のスタッフ一同を代表して、長年にわたる上條先生の大学教育ならびに大学管理・運営にかかわる御貢献に心より御礼申し上げます。